

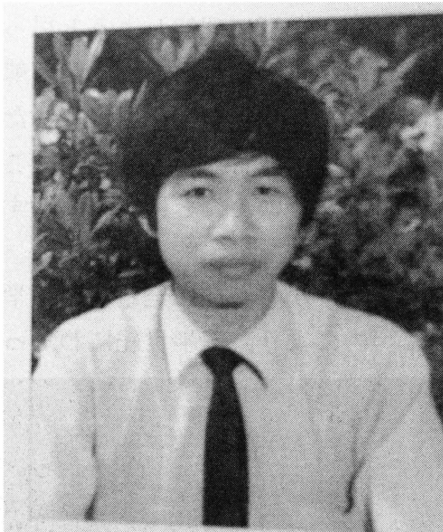
相手を真に理解しようと思ったら、相手から自分を見なければならない  
一人に優しく自分に厳しい教育研究者 船尾日出志先生－  
土屋 武志（愛知教育大学）

If you thought trying to correctly understand the others, you must look at yourself from others－Mr.FUNAO Hideshi, Kind to others, but tough person to himself.－

TSUCHIYA Takeshi

私の船尾日出志先生の印象は、「人に優しくご自身に厳しい」という印象である。私が愛知教育大学に着任して以来 20 年たつが、着任早々、船尾先生がご自身の授業（たぶん社会科研究）を私に見せてくださったときの光景は、いまでも鮮明に思い出すことができる。学生たちが、グループで地域を調べたこと発表している場面だが、大学の授業に対する私の既存のイメージが大きく揺さぶられた瞬間だった。難しく講義をしなければならないと思っていたところで、学生に活動させることもできるのだと目からウロコだった。

船尾先生は、愛知教育大学に 1988 年に着任されたが、その前は大阪府立吹田高校で教鞭を執られていた。学生時代から英語やドイツ語など語学を徹底的に学び寸暇を惜しんでド

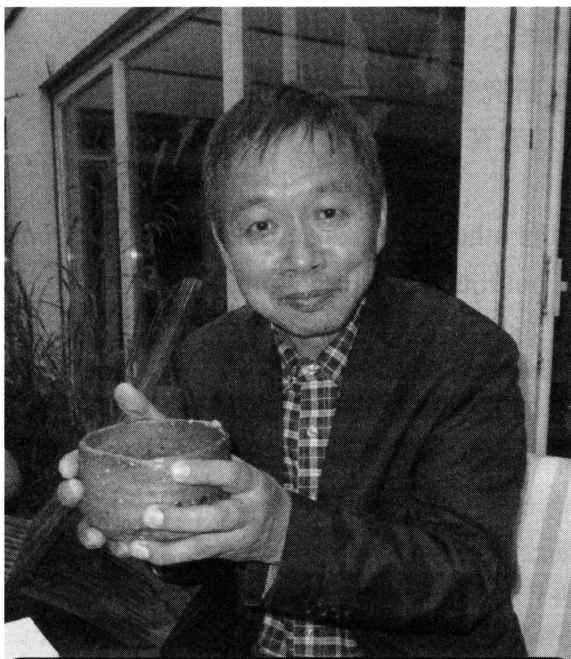


高校教員時代

イツの哲学論文や教育論文を翻訳されてきた。大阪・神戸間の通勤時間に電車内で翻訳をされ、疲れもあって最寄り駅で降り損ねることもたびたびあったそうだ。そのご苦勞された研究業績が高く評価されて大学に割愛されたわけだが、高校教師を務めながらの研究は、その時間的経済的な困難さは、私も高校教師を経験しているだけによくわかる。私の場合は、実践研究中心におこなったので、研究と教育との時間を共有化できたが、外国文献を細密に読み込み日本語に翻訳するという地道な研究は、高校が義務教育学校に比べて多少は時間的なゆとりがあるとはいえ、相当のご苦勞だったといえる。最近、船尾先生が大学院生にスピーチされたとき、いまでも毎日、外国語文献を読ん

で就寝されるという話をされ、研究が生活の一部となっていると感心させられるとともに普段の努力が必要だと私自身反省させられた。

このように、ご自身に対して厳しい船尾先生は、私には、常にチャンスを与えてくださるとともに優しい言葉をかけて励ましてくださる先生である。厳しく問われたり叱られることなく、「いつもありがとうございます」「助かっています」「活躍してください」と言葉をかけられ、それが、私が愛知教育大学で「自由に」考え活動できた支えだと思う。しかしながら先生によれば、学生に対しては、結構厳しい面をお持ちで、ドイツ語原典の読解を中心にしたゼミでは、学生を泣かせることもあったそうである。しかし、附属特別



ドイツボーデン湖畔のシュタイニヤンス博士の日本庭園にて

支援学校の校長として勤務されたことがきっかけとなって、船尾先生は、自分の研究スタイルを学生に押しつけるのではなく、学生たちが楽しく笑顔で学ぶことができるような環境をつくらないといけないと強く考えるようになったそうである。先生が校長時代の 2009 年に附属特別支援学校で介護等体験を受けた学生が、意地悪なことをする子どもに注意すべきか考えていたとき、子どもたちの中で、声をかけたり、助けたり、自分たちで解決する姿を見て、子どもたちに学んだという感想を書いた。船尾先生は、このような学生の姿から、学生は自分の力でしっかり学ぶことがあること、それなのに「自分が学生を導いてあげよう、高めてあげようと不遜にも思っていた」と気づかされたそうである。先生は、その理

由を、「自分が学生を一方的にのみ見て、学生の側から自分自身を見ていなかった」からだという。附属での「初めに子どもありき」の経験は、「相手を真に理解しようと思ったから、ただ相手を見るだけでなく、相手から自分を見なければならぬ」という人間理解につながったのだが、私から見ると、船尾先生は、かなり以前からそれを実行されていた。自分自身への厳しさの先に他者への優しさを持つ船尾先生と愛知教育大学で出会えたことは、私の人生に大きな幸運だった。大学教員として育てていただいたことに深く感謝する次第である。

なお、船尾先生は、愛知教育大学社会科教育学会の立ち上げから現在に至るまで、学会の発展に大きく寄与された。本誌『探究』も、先生のご努力により、四半世紀にわたって継続して刊行され、社会科教育研究を支えている。この点については、本誌第 25 号の船尾先生による巻頭言を参照されたい。船尾先生は、平和と民主主義を支える社会科教育に確かなビジョンを持って発言されてきた。2016 年 3 月末をもって愛知教育大学特別教授の任も終わられるが、今後も、社会科教育研究の目標を指し示し続け、本会の活動を支えていただきたいと心から願っている。



研究室の学生および卒業生と懇親会